

# 沖縄県の幼稚園・小学校における「宮良長包音楽」の実践状況と方向性(5)\* —幼小連携の可能性を探る—

大山伸子\*\*

## Abstract

これまで筆者の先行研究において、「宮良長包音楽」が沖縄県の幼稚園・小学校・中学校・高校でどのように実践されているか、実態を明らかにし、その方向性を探ってきた。(註1~4)

本論文は、幼稚園と小学校の実態調査に基づいて課題を見出し、さらに、今後の幼小連携の可能性をも探るものである。

本研究の結果から、「宮良長包音楽」の実践率が幼稚園28.8%、小学校が37.8%と低率を示しているのに対し、「学校教育に取り入れる必要性」については、幼稚園46.4%、小学校74.6%と高くなっている。「実践していない」と「実践の必要性はある」という乖離を検証し、実践的方法論を具体化する必要性が急務であろう。

また、「宮良長包を良く知らない」の回答もあり、学校教育で「宮良長包音楽」は世代継承がなされていない実態が浮き彫りになっている。

一方、「幼稚園児の年齢で歌うには旋律が難しく音域が広い」「どのように取り扱うか、教材研究不足」等の回答もあり、幼児の発達を踏まえた教材や小学生向けの教材開発が必要不可欠だろう。

さらに、「長包音楽の曲目別認知率の推移」をみて見ると、幼稚園、小学校で、「安里屋ユンタ」「えんどうの花」「汗水節」が導入段階として基礎的学習となり、中学校、高校と学年を経るにつれて、「なんと浜」「赤ゆらの花」「琉球木遣歌」「泊り舟」など教材が豊富になり、多様な展開で学習を深めていることがわかった。

また、実践的事例として、幼小連携による八重瀬町立具志頭幼稚園、具志頭小学校の実例と、石垣市立まきら幼稚園、真喜良小学校の聴き取り調査や資料調査による事例を紹介しながら、実践の可能性を探っていく。

## I. 目的

本研究は、沖縄県を代表する音楽教育家・作曲家の宮良長包(1883~1939)の音楽が、現状、幼稚園、小学校でどのように実践されているか、アンケートや聞き取り調査に基づき、その実践的課題を見出し、幼小連携による「宮良長包音楽」の可能性を探る。

## II. 方法

調査方法：質問シート方式。Q1~Q17(選択/記述)

聞き取り調査

調査期間：2009年8月20日~9月20日(アンケート調査)

2009年8月20日~2012年10月(聞き取り調査)

---

\*The Direction and Circumstances in which Choho Miyara's Music is Practiced in Kindergartens and Elementary Schools in Okinawa Prefecture(5) —Exploring Possibilities for Cooperation between Kindergartens and Elementary Schools—

\*\*Nobuko Oyama

対象件数：沖縄県の公私立幼稚園 278 園及び小学校 279 校

回答者：幼稚園教諭、小学校音楽担当教諭及び園長（校長）

### Ⅲ. 結果と考察

データ結果・分析による【図1～8】は本文中に、【表1～10】は巻末に表記した。

#### ポイント1. 有効回答率

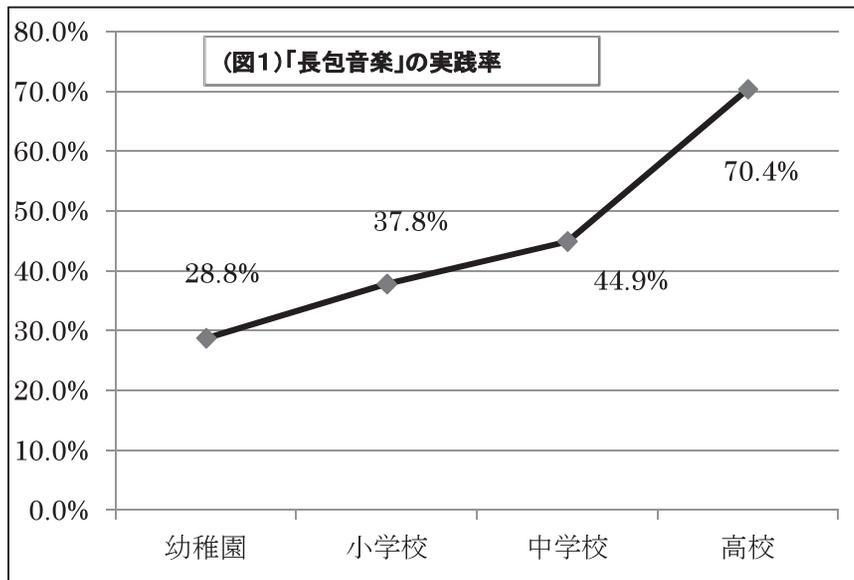
有効回答率は、幼稚園 55.0%（153 回答／278 園）、小学校 42.7%（119 回答／279 校）で、幼稚園の回答数が 12.3%多い。【表1】

#### ポイント2. 実践率

実践率は、幼稚園 28.8%（44 園／153 回答）、小学校 37.8%（45 校／119 回答）で、小学校の実践率が 9.0%高くなっている。【図1】によると、幼稚園から小学校、中学校、高校を経るにつれ実践率は高くなっており、この結果は、ポイント9の「宮良長包音楽を学校教育に取り入れる必要性」が、幼稚園・小学校・中学校・高校と徐々に高くなっている傾向とも一致している。

それは、幼稚園、小学校で「長包音楽」の学習や体験が基礎力となり、学年を経るにつれて音楽性の豊かさを育てている結果に繋がっているのではないだろうか。

【図1】「宮良長包音楽」の実践率



#### ポイント3. 実践形態

実践形態は、幼稚園が不定時（随時）の 68.2%、小学校が不定時の 82.2%で、両者とも不定時の実践が圧倒的に多い。【表2】

#### ポイント4. 保育（授業）内容

使用教材、使用曲名、使用楽器、保育（授業）内容について、項目ごとにまとめた。

①使用教材

幼稚園では「CD」18件、「カセットテープ」13件、「楽譜」11件と上位を占め、小学校は「楽譜」19件、「CD」15件、「工工四(三線の楽譜)」6件が上位を占めている。【表3-①】

②使用曲名

幼稚園は、「安里屋ユンタ」27件、「えんどうの花」16件、「汗水節」4件となっており、小学校は、「えんどうの花」33件、「安里屋ユンタ」23件、「汗水節」6件で、「安里屋ユンタ」「えんどうの花」「汗水節」は、幼稚園、小学校共に上位3曲で一致し、教材として有効に活用されている。【表3-②】

また、「安里屋ユンタ」と「えんどうの花」は、ポイント10で後述する、「長包音楽の認知度」でも94%以上の高率が得られ、教材としての取り組み易さを裏付けている。

【図2】使用曲の推移

(図2)使用曲の推移		使用曲名回答のみ		※兼務(複数校担当)含む	
ステージ	使用曲名	幼稚園	小学校	中学校	高校
導入のステージ	安里屋ユンタ	27	23	※16	16
	えんどうの花	16	33	※19	12
	汗水節	4	6	2	1
展開のステージ	唐船	2		1	
	鳩間節		2		
	大鷹小鷹	1	1		
	鷺ぬ鳥	1			
	牛	1			
	発音唱歌		1		
多様性のステージ	琉球木遣歌		1	1	
	なんと浜		1	2	
	綾雲		1	1	
	山の子守唄		1		1
	校歌		1		
応用のステージ	赤ゆらの花			1	
	泊り舟			2	1
	桑の実				1

③使用楽器

幼稚園の保育者使用は、「ピアノ」14件、「CD」3件、「三線」3件、「パーランクー」3件で、小学校では教師使用が「ピアノ」27件、「三線」8件、「CD」3件となっており、保育者使用、教師使用共にピアノの活用度が最も高かった。

また、園児使用は、「パーランクー」12件、「メロディオン」2件で、小学校の学習者使用は、「三線」10件、「リコーダー」8件、「ピアノ」4件、「パーランクー」3件となっている。園児使用は「パーランクー」、小学校の学習者使用は「三線」の頻度が最も高い。【表3-③】

#### ④保育（授業）内容

保育（授業）内容を類型化すると、幼稚園は、「安里屋ユンタ」が踊りの 13 件とパーランカー演奏（16 件）、エイサー（11 件）、リトミック（1 件）、小学校は、「えんどうの花」を歌唱指導（29 件）、合奏指導（4 件）、リコーダー指導（1 件）、鑑賞指導（1 件）、劇幕間合奏（1 件）、三線と器楽合奏（1 件）、金管ピアノ伴奏（1 件）である。【表 3-④】

ポイント 4 を全体的にまとめてみると、教材として使用する「安里屋ユンタ」「えんどうの花」「汗水節」は幼稚園、小学校で共通して有効活用されており、学習ステージとして導入段階と考えられる【図 2】。続く、「唐船」「鳩間節」「大鷹小鷹」「鷺の鳥」「牛」等の多様な曲は、学習ステージの展開段階と捉えることができる。さらに、「発音唱歌」「琉球木遣歌」「なんた浜」「綾雲」「山の子守唄」「校歌」は、多様性のステージと考えられる。そして、「赤ゆらの花」「泊り舟」「桑の実」は、応用のステージと判断できよう。学習形態も、聴く→手踊り→パーランカー演奏→リコーダー演奏→斉唱→合唱→合奏へとヴァリエーションに富んで変化している。

また、図 2 の点円形で示すように、幼稚園は、「唐船」「大鷹小鷹」「鷺ぬ鳥」「牛」まで活用されているものの、「発音唱歌」以降は活用されていない。

小学校は、「発音唱歌」「琉球木遣歌」「なんた浜」「綾雲」「山の子守唄」「校歌」まで活用されているが、「赤ゆらの花」以降は活用されていない。

中学校、高校においては、「赤ゆらの花」「泊り舟」「桑の実」まで活用されている。これは、幼稚園、小学校に最適な教材と、中学校、高校に最適な教材の活用を示していることが捉えることができる。

この結果から、「長包音楽」を経験し学ぶ基礎は、「安里屋ユンタ」「えんどうの花」「汗水節」で、その後、「長包音楽」の様々な曲を習得し、学習の豊かさへと発展していることがわかる。

#### ポイント 5. 発表する機会

学校行事における発表の場では、幼稚園は、「発表会」14 件、「祖父母保育参観日」9 件、「運動会」8 件、「お招き会や老人ホーム訪問」8 件、「交流会」3 件、または、「幼少連携・小学校合同行事・宮良長包音楽集会」1 件等、豊富である。

小学校は、「運動会」10 件、「学芸会」7 件、「音楽朝会」6 件、「音楽発表会」5 件、「学習発表会」2 件、「卒業式」1 件等があり、特に、「宮良長包音楽集会」を実践している小学校は<sup>(註 5)</sup>、学校教育の特徴として「宮良長包音楽」を教育方針に掲げ、重要視していることがわかる。

##### 【表 4-①】

地域行事における発表の場では、幼稚園は、「祭り」2 件、「敬老会」2 件、「音楽祭」1 件があった。地域まつりの舞台発表などもあり、地域人材活用の取り組みが目立った。

小学校では、「敬老会」「公民館祭り」「宮良長包音楽劇の出演」「カジマヤーのパレード鼓笛演奏」などがあり、学校外の活躍も目立つ。「カジマヤーのパレード」とは、100 歳の祝いに家族や地域の人々が、長寿のあやかりとして車で地域を祝賀パレードする沖縄県の風習で、人々と地域社会が密接につながっている代表的なものである。【表 4-②】

その他では、幼稚園で「保育のおやつ・弁当の時間の BGM」「お祭りごっこ」「体育館活動や夏祭り」などがある。

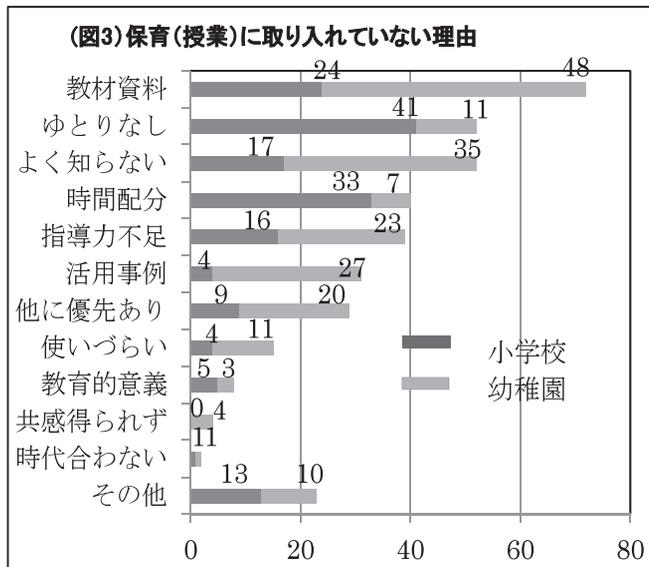
小学校では、「モーニングコンサート（老人会との交流コンサート）」「全校で音楽朝会」があり、上記の「カジマヤーパレード」のように、高齢者との交流に「長包音楽」が世代間を繋ぐ重要な役割を果たしている。【表4-③】

**ポイント6. 保育（授業）に取り入れてない理由**

幼稚園が「教材・資料が少ない」48件（24.0%）、小学校は「教科書中心でゆとりがない」41件（24.6%）をトップに挙げている。「宮良長包音楽をよく知らない」は、幼稚園35件（17.5%）の2位で、小学校は17件（10.2%）の4位で共に上位にあり、世代継承が十分にされていない要因が顕著に表れている。

また、「時代に合わない」がそれぞれ1件ずつあり、多様な音楽的環境にある現代の子供たちの感性に、「長包音楽」は受け入れられないという意見だろうか。【図3】【表5】

**【図3】 保育（授業）に取り入れていない理由**



**ポイント7. 「宮良長包音楽」との接点**

幼稚園は人的接点（「学校で教わった」「家庭から教わった」等）が169件で多く、小学校はメディア的接点（「演奏会で聴いた」「ラジオ・テレビで知った」等）が162件と多い。

幼稚園の内訳をみると、「学校で教わった」84件がトップで、「ラジオ・テレビで知った」52件、「家族から教わった」39件、「演奏会で聴いた」38件、「先輩・知人から教わった」26件となっている。

小学校の内訳をみると、「学校で教わった」63件がトップで、「演奏会で聴いた」53件、「ラジオ・テレビで知った」37件、「家族から教わった」27件、「評伝・作曲集で知った」27件となっている。

幼稚園、小学校の共通点は、「学校で教わった」がトップであるが2位以降は、それぞれ別項目の順位になっている。

総計は、幼稚園が人的接点169件、メディア的接点が132件に対し、小学校は人的接点130件、メディア的接点が162件で異なった数値を示しており、この結果の差異は興味深い。

【図4】【表6】